

3. 輪島市西保地区における地域生活の総合調査

(代表) 下里 真悠子 (文学部人間学科 文化人類学コース 3年)
阿部 憲和 井熊 志保 板谷 佳治 岩崎 元香
遠津 有美子 太田 隆宏 大根田 紀乃 亀井 望
寺嶋 亜香音 山田 周平

(文学部人間学科 文化人類学コース 3年)

指導教員

鏡味 治也 (人間社会環境研究科フィールド文化学専攻 教授)
西本 陽一 (人間社会環境研究科フィールド文化学専攻 准教授)

1. 背景と研究目的

当研究室では、フィールドワークと呼ばれる聞き取りを主とした調査を中心に研究している。フィールドワークは未知の集落へ行き、そこでの習慣や行事を学ぶことで異文化を体感し、自分の持つ既知の文化を相対化することを目的とする。

学部生は3年次に石川県内のある地域を対象としたフィールドワークを課せられる。フィールドワークを通して、学部生はフィールドワークの手法と目的を学ぶのである。

2. 概要

3年次の春季学期に対象地域を選択、その地域について郷土資料や各種センサスを利用して文献調査を行う。そして夏期休暇期間中に対象となる地域に1週間調査のために滞在する。本年度は石川県輪島市の西部に位置する西保地区の4集落、大沢、上大沢、西二又、上山を調査対象に選び、8月1日から8日までの1週間フィールドワークを行った。

聞き取り調査は主な手法としてはあらかじめ連絡を取った住民の方々のお宅に伺い、聞き取りを通して地域に関する全般的な事柄を学ぶ。またそのほかにも道すがらの住民との雑談によって情報を得たり、祭りの準備等の参与観察を行ったりすることもある。

秋季学期に学部生は各々調査テーマを設定し、各自補充調査を行いながらデータを補充し、中間報告会で理論を改善しながらテーマについてまとめ上げる。まとめ上げられた内容は調査報告書として刊行され、大学図書館などと共に地域の世帯にも配布、還元される。

今回調査地に選ばれた4集落は海に面した地域から山に入り込んだ地域まで多彩に富んだ風光明媚な地域である。最も大きな集落である大沢は古くは港町として栄え、海運業等で賑わったという。その西に位置する上大沢は「間垣」と呼ばれる竹で作られた風の力を弱める垣根で集落全体が覆われている。その南に位置する西二又は3つの小集落からなる集落で、上大沢と上山の中間に位置し、最も地区組織の整った集落である。さらに南に下

った山側に位置する上山は 6 つの小集落からなる。昔ながらの住居が多く残っており、信心深い人が多い。

3. 調査内容

調査報告書にまとめ上げられたテーマであるが、「地域概要」に始まり、地域関連として「交通」「出稼ぎ」「地区組織」「間垣」、冠婚葬祭として「大沢の大祭」「虫祭り」「出産」「葬儀」「先祖供養」、信仰として「お講」「浄土真宗」、そして最後に「民話：長太猪」について取り上げている。この中から今回は特に説明の必要な「間垣」「虫祭り」「長太猪」について簡単にではあるが説明を試みる。

3-1 間垣

間垣は西保地区の海に面する集落、すなわち大沢と上大沢に存在する、竹で作られた垣根である。冬の厳しい北風から家々を守るために作られたものであるが、風を防ぐというよりは、力を弱めて方向を変えるために存在する。竹の隙間から風が抜けるためである。また竹はしなるために、風による倒壊の心配がないという利点もある。その特異な外観から、観光客もよく訪れるという。

間垣は基礎を組み、竹を挿し、それを縛るという工程で作られる。間垣の基礎となる丸太には腐りにくいアテが使われている。竹はヤダケという、油分が多い竹を主に使用する。水をはじくために重宝される。そのほかニガタケという竹もよく使われる。大沢では竹の変わりに「コワ」と呼ばれる細い板を竹の代わりに挿す民家もあるが、これは昭和 50 年代からのことだという。竹を縛るものは以前は藤のツタが使われていたが、耐久性にかけるため、現在では各世帯で最適と思われるものを使用している。具体的にはロープ、ナイロンのひも、針金などである。

補修は毎年秋に行われる。間垣はほとんど壊れることはないが、竹にも寿命があり、冬への備えとして新しい竹が継ぎ足される。各世帯の持分である間垣を、自分たちの都合のいい日に補修する。方法は見よう見まねで伝えられるため、各世帯によって違う。上大沢では間垣の分担が精密に決まっている。

上大沢では現在も冬場の風が強くその必要性が認められるが、大沢では防波堤が作られたために風が弱くなり、上大沢ほどの必要性がなくなった。その上、大沢では過去数度の火事があり、間垣はその度に火が移る原因となってきた。それでも大沢に間垣が立っているのは、観光の面からである。輪島市が間垣を観光資源にしたいと考えており、大沢や上大沢に続けるよう指示しているという。市によると間垣は生活の知恵としての伝承と考えられており、これを観光として紹介できると考えているのだそうだ。しかし基本的には個人物であり、強制ではないということである。ただし、事実として観光客がしばしば訪れ、メディアに取り上げられることも良くあるという。大沢では「見に来る人がいるのならば」と続けている面もあるようだ。

3-2 虫祭り

虫祭りは他につく害虫を追い払うために行われる農耕行事である。人形に害虫の霊を宿し、村外に送り出すという方式がよく見られる。鉦や太鼓、松明を用いるところも多い。かつては全国的に行われていたが、農薬の普及によって廃れた、あるいは芸能としてのみ残っているケースが多い。西保地区では上山から西二又、そして上大沢にかけて行われていた。1970年ごろに西保地区でも行われなくなったという。

上山では現在は神事だけが行われている。毎年6月20日頃、各家から米を一升ずつ持ち寄り、神主に謝礼として渡す。人々は朝に集まるとまず神社の清掃を行い、その後神主が神社に来て神主は祝詞をあげ、全世帯分のゴエ（御幣）を祭壇に飾り、お祓いを行う。終わるとゴエは各世帯に配られる。来なかった世帯の分は小集落の班長が代わりにもらい、後で配る。

虫送りはかつては夕食後に行われた。集落の人たちはたいまつを持って田に集まり、一列に並んで火をつけたたいまつを手に、田の周りを回る。たいまつは竹を細く切って束ね、石油を少し含ませたものである。このとき「ウンカムシは出て行けー」という掛け声を伴う。太鼓もあるがこれは広場に置かれて叩かれていたという。祭りが終わるとたいまつは川に流される。これと共に虫も流されるということのようである。廃止となった理由としては、防火のため、農薬のため、若者の減少のためなどが上げられるという。

西二又では廃止以後、関連行事は行われていない。上山のような正式な神事もなかったという。かつては上山の虫祭りが終わってから行われていた。直接連絡が来るわけではなく、祭りがあったということを噂のように伝え聞いてから行われたのだという。区長が祭りの日時を決め、集落中を回って知らせたという。村人は全員参加が原則で、夕食後神社に集まる。麦わらの大きな束を担いで持ち寄り、そこから一掴み引き出してたいまつとした。区長が神主代わりとなってお宮参りをし、参加者は奉納された神酒を頂いて虫祭りは始まる。神社から太鼓を下ろし、芹池と呼ばれる集落内の標高の高い土地から、上山にほど近い男女滝（なめたき）の側の男女滝小学校へ向かい、休憩を挟んで上大沢の境まで歩いて終わる。たいまつや余った麦わらはそこで燃やしたという。廃止となった最たる理由は若者の減少であるが、農薬の普及も一因であるようだ。

上大沢では現在も神事と虫送りが行われている。神事は祭りの前日か、当日の午前中に行われる。これには手の空いているものが参加する。神主は祝詞を上げ、ゴエを奉納する。それで神事は終わり、その後参加者はゴエを貰って帰る。いない人の分は参加者が一緒に貰い、代わりに渡す。また、虫送りまでに太鼓を神社から下ろしておく。虫送りは夕食後、集落前の橋から始まる。青年団によりたいまつが渡され、太鼓と掛け声と共に西二又との境まで行き、それぞれの持つ田のうちの一つの畦（あぜ）にゴエとたいまつを立てる。休憩後、集落まで戻り、たいまつを消す。そこから川沿いを通り、浜に出る。用意された火付きのやぐらにたいまつを入れて燃やし、皆が集まってからわらの船を海に浮かべる。

たいまつを火を船に移し、沖へと押し出す。これを見送って終わりとなる。船の道のりが作物の豊凶を占うことにもなるという。

たいまつは現在は竹を切ったものに灯油をしみこませた古着を詰めたものだが、昔は麦わらで作られていた。麦が金にならないということから廃れたという。また、日時も西二又の後だったものが日時固定となった。上大沢でも一時は失われたが、青年団によって復活した。

3-3 『長太猪』

『長太猪』は元は『長太と猪』と言う。長太という木挽きと猪の物語であり、大沢に伝わる。詳細は伝わり方で若干の違いがあるが、概要は以下。

「長太という木挽きが松林を買って暮らしていた。すると山に古くから住んでいた猪が怒り、長太に様々な悪戯をした。長太が変わらぬ生活をするので猪は怒り心頭になり、勝負を挑むが負けてしまう。数年後、長太のもとに猪の妻が復讐に来るが、長太がお守りを持っているため手が出せない。代わりに長太に夫の霊を弔う法会を営むことを頼む。長太は霊高寺（大沢に実在する寺）に頼んで法会を行ってもらい、その後妻の猪は長太の前に現れなくなった。」

この話は元来大沢に伝わっていたものだが、幕末の頃に霊高寺の住職が説教話に直し、能登一円を始め遠くは大阪など各地で説教をして回り、結果として広く知られるようになったという。先々代が長太猪を語られる際は身振り手振りや、節をつけといった特徴があったという。また、必ず何日間かにわたって行われていた。

現在は衰えてしまったが、その要因として 2 つ挙げられており、一つは説教を聴きに来る人が減ったこと、もう一つは長太猪の説教話が霊高寺内で継承されなかったことである。前者は具体的にはバスが運行されるようになったことでお勤めを時間内に始める必要があり、このため「着いた頃には終わっている」という事態が発生し、ぱったりと来なくなったという。また、後者は住職が遠方で説教をすることが多かったために逆に地元で説教を行う機会が減り、結果として継承されなかったということである。

霊高寺では 2 月下旬に「おたいやさま」と呼ばれる行事が行われる。長太と戦った猪の霊を弔うための法要が元になっているという。妻の猪が長太につけた法要の条件として、「逮夜」という、仏教用語で昼過ぎからのお勤めを指す時間帯を指定したのだそうだ。ここから同様の時間帯に行う法要で一緒に猪の霊を弔ったことが「おたいやさま」の名を持つこととなった。現在はお参りに来る人もほとんどおらず、説教もない。「おたいやさま」の名だけが法要に残されている。

大沢に残る長太猪としては、老人が子供に話す物語として人気があったという。話し手によって強調されるシーンが異なり、特に長太と猪が闘う場面は人気があったためかバリエーションに富む。また教訓話としても伝えられ、自分なりに物語が解釈されるのだという。結果として、話し手や聞き手次第で物語は変化している。

4. おわりに

毎年の調査実習は多くの方々の協力を必要とする。本年も調査地の成員の方々を始め、多くの協力を頂いた。この場を借りて改めて御礼申し上げます。